「兄弟都市」豊中市との交流史

北村　毅
大阪大学大学院人文学研究科教授

◎はじめに
霊石が結んだ半世紀

沖縄市は、国内4都市（大阪府豊中市、山形県米沢市、愛知県東海市、東京都町田市）、ならびに、海外1都市（米国レイクウッド市）と提携・友好関係にある。この五つの都市の中でも、最も長きにわたって関係を築いてきたのが豊中市である。

豊中市は、大阪府のベッドタウンとして40万近い人口を擁し、関西の空の玄関口である大阪国際空港（伊丹空港）の所在自治体の一つとして知られている[1]。敗戦後から1950年代まで大阪国際空港が米軍基地「伊丹エアベース」として使用されていたことから、沖縄市と同様にそこは「基地の街」でもあった。

豊中市との交流の始まりはコザ市時代の1964年にまでさかのぼり、沖縄市が誕生した1974年の11月に市民福祉と平和を祈念して「兄弟都市」提携が結ばれ、現在へと至る。

「兄弟都市」とは豊中市との間に限った名称であるが、他の都市との関係において一般的な姉妹都市や友好都市という言葉が使われていることからも、豊中市との間に何か特別な関係があることがうかがい知れるだろう。この名称は、「いちゃりばちょーでー」（出会えば兄弟）に由来するといわれるが[2]、はたして沖縄市と豊中市の間にどのような出会いがあったのだろうか?

両市の交流は、1964年、沖縄市から豊中市に石が贈られたことに始まる。その石は、「霊石」と呼ばれ、多くの人びとが数カ月に及ぶ地上戦の果てに命を落とした沖縄島（以下、本島）の南端で拾われたものであった。霊石をきっかけとして、両市は、50年以上にわたって交流を重ねてきたわけである。本稿では、霊石が結んだ豊中市との間の半世紀に及ぶ交流の歴史の一端を書き留めておきたい。

◎「霊石」とは何か?

まず、豊中市との交流の話に入る前に、霊石とは何か、同時代においてそれがどのような意味を有していたのか、説明しておきたい。

1959年に沖縄への渡航制限が緩和され、翌年4月に自由化された後、沖縄への観光客数は漸次増加していったとはいえ、1964年当時、沖縄を訪れる人びとは5万人余りに過ぎなかった[3]。2019年に過去最高を記録した約1,016万人[4]の沖縄県入域観光客数と比べると、その数はいかにも僅少である。当時「本土」から沖縄を訪れる人びとの目的は、今のようにリゾート観光が中心ではなく、遺族の慰霊巡拝、政治家・行政関係者などの視察、商用が主であった。

1964年の那覇市商工観光課の調査では、約4割の「外客」が沖縄への「来島目的」に「戦跡地参拝」を挙げている[5]。その多くが「本土」の遺族であったと考えられるが、彼らは「慰霊巡拝団」「遺族団」として集団で本島中南部の慰霊塔（慰霊碑）を巡り、現地の人びととの交流の中で戦死者の最期を知る手掛かりを得ようとした。そして、戦死者が亡くなった（と推定される）場所の近くにある慰霊塔・碑などで慰霊行為を行い、その周辺の石や土を拾って郷里へと持ち帰った（図1参照）。それらは、「霊石」や「霊土」などと呼ばれた。

「本土」からの数十人規模の集団での戦跡巡拝は、1954年の北海道遺族団に端を発し[6]、その後日本遺族会や各県の慰霊巡拝団の来島が相次いだが、当時沖縄への船旅は経済的にも体力的にも負担が大きく、そのような機会に恵まれた遺族はほんの一握りであった。慰霊巡拝団の参加者は、在郷の遺族の代理・代表として、戦死者の遺骨や遺品の収集を託され、それが叶わない場合、死没地の石や土を持ち帰ることを期待されていた。霊石という言葉には、死没地と郷里をつなぐ戦死者の魂の依り代としての意味が込められていたといえる。

図1：沖縄で「霊石」を拾う北海道の遺族（1954年）
［鈴木龍一氏提供］

1957年、そのような「本土」在住の数十万の遺族の思いに応えようと、沖縄で「沖縄の霊石を贈る運動」[7]が立ち上げられた。この運動を始めたのは、郵便友の会（現・PFC［青少年ペンフレンドクラブ］）という全国組織の会員である沖縄の子どもたちであった。郵便友の会とは、文通での交流を通して、「平和」（Peace）と「友愛」（Friendship）と「教養」（Culture）を育むことを目的として、1949年に設立された団体[8]であり、中高生を中心に活発な運動を展開していた。沖縄でも1952年頃に同会の下部組織が作られ、途中活動が中断していた時期もあったようだが、1957年8月には沖縄連合が発足している。1957年の第9回全国大会では、4名の沖縄代表が参加し、「沖縄との交流を深める」ことが決議されている[9]。

そのような沖縄と「本土」の交流の一環として、1957年から1961年にかけて、沖縄の郵便友の会のメンバーが中心となり、本島南部の戦跡で累計7万個にも及ぶ霊石が収集され、那覇市の護国寺で「入魂式」が行われた後、「本土」の戦死者遺族に送られる運動が展開された[10]。沖縄と「本土」遺族との間の仲介役を担ったのが、大阪を中心に活動していた近畿地方郵便友

の会連合であり、大阪の四天王寺で「霊石追悼法要」を行った上で、全国各地の郵政局を通して遺族に霊石を送り届けた[11]。「本土」の遺族は、霊石を「形見」や「霊のかわり」として受け取ったのである[12]。

霊石を「本土」へと送り届けたのは、郵便友の会だけではなかった。例えば、1958年に富山県で開催された国民体育大会（国体）では、沖縄選手団一行が霊石を持参して、同県の遺族に手渡している[13]。沖縄選手団による国体開催地への霊石持参は、1954年の北海道国体に始まるようだが[14]、当初あまり話題にはならなかったようである。1962年の岡山国体では、開催地からの依頼で拾い集められた岡山県の沖縄戦戦死者と同数の霊石が沖縄選手団に託された。この継続的な試みについて、『沖縄タイムス』の社説（1962年10月20日付）は、「沖縄と『本土』の人々を結ぶきずなともなり、沖縄の国体参加に、また別の意義を加えている」と評価している。

他にも、靖国神社参拝団（1958年4月）[15]、沖縄PTA連合会（同年7月）[16]、ボーイスカウト（1960年9月）[17]などさまざまな団体や個人によって霊石が拾われ、「本土」に送り届けられた。その内の一人は、地元紙のインタビューに「私が送ってあげた霊石は、足を運べばできることだし、血のつながった同胞としてあたりまえのことをしたまで」と語っているが[18]、それは前掲の『沖縄タイムス』の社説の論調にもみられるように、霊石というメディアを介して「同胞」としての承認を求める運動としての性格を有していた。

1964年と65年には、沖縄から送られた霊石をもとに「本土」で二つの慰霊碑が建立されている。一つは、64年8月、高野山に建立された沖縄戦戦没者供養塔であり、沖縄で採石された15トンの霊石が用いられた[19]。もう一つは、65年9月、札幌市に建立された沖縄戦英霊記念の碑であり、沖縄で収集された約4万個の「沖縄戦場の遺骨にかわる流血の小石」（同碑碑文）が礎石として使われた[20]。

ここに挙げたのはほんの一例に過ぎないが、以上のように、郵便友の会の試みをきっかけとして、さまざまな団体や個人が「本土」に霊石を送る中で草の根の交流を展開していった。沖縄市と豊中市の交流もまた、このような同時代の流れの中で、霊石を送る運動から始まったのである。

◎「霊石」に始まる交流

1964年10月、当時の豊中市の竹内義治助役が、沖縄道路事情視察団の一員として沖縄を訪問した[21]。このとき竹内助役が、当時コザ市長であった大山朝常と懇談したのが、沖縄市と豊中市の最初の接点である。ちょうどその頃、大山の四男が豊中市にある大阪大学のキャンパスに在籍していたこともあって[22]、豊中市との間に奇縁を感じていたようである。

両者の出会いの翌月、今度は大山市長が豊中市を視察に訪れた。大山は福祉施設や清掃工場などを視察した後で竹内と懇談したときに、竹内から以下のように語りかけられたという。

> 豊中市の遺族のなかにも沖縄で夫や子どもを失った人たちが多い。ほとんどの人が遺品も満足にないありさま。記念になるものがあるとありがたいんだが…[23]。

「記念になるもの」として大山の念頭に浮かんだのが霊石であった。大山自身、長男と次男と長女を沖縄戦で亡くし、遺骨すら還ることのなかった遺族の一人であり、子どもたちの亡くなった場所も命日も分からなかったため、「遺骨代わりに糸満市の海岸から小さな石ころを取ってきて骨がめに収め」た経験があった[24]。同じ立場にある「本土」の遺族に対して共感があったことは想像に難くない。

視察から戻ってすぐに、大山は竹内の願いを叶えようと動き始める。1964年11月、沖縄戦没者慰霊奉賛会（現・沖縄県平和祈念財団）の協力のもとで摩文仁の海岸で石が拾い集められ、30センチ四方の白木の箱に収められた[25]。それらの石は、当時沖縄と関西を結んでいた貨客船「黒潮丸」で運ばれて海を渡り、翌月豊中市役所に到着し、市内の遺族のもとに伝達された。

はるばる沖縄から送られてきた霊石について、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞といった全国紙の大阪版が12月9日付で報じている。『朝日新聞』が「遺族にとっては思いがけぬ、“クリスマスプレゼント”」と伝えているように、「本土」の沖縄戦遺族にとって、それは贈り物であった。

豊中市出身の沖縄戦戦死者は約150名を数えたが[26]、遺骨や遺品が戻ってきた遺族はほとんどいなかった。「戦死公報だけで何ひとつ形見になるものはありません。霊石を頂いたら、あらためて供養したい」という豊中市の遺族の談話が『沖縄タイムス』に掲載されているが[27]、霊石は、単なる石ころではなく、遺骨さえ還らなかった家族にとって亡き人の「形見」にほかならなかった。

コザ市から贈られたものは、霊石だけではなかった。後に沖縄市の「市民の花」となった仏桑花（ハイビスカス）も豊中市に届けられている。竹内が沖縄の南部戦跡に咲いているハイビスカスを見て、「まるで戦没者の血潮のようだ」「豊中市に住む沖縄戦没者の遺族にあげたい」と大山に話したことが契機となり、ハイビスカスの苗木が贈呈されることになった。20本の苗木は清掃工場の温室で「友情の花」として育てられ、高さ40センチにまで成長して真っ赤な花を咲かせ、豊中市の職員の間で話題を

摩文仁の霊石
豊中市の遺族へおくる

図2：「摩文仁の霊石　豊中市の遺族へおくる」（『沖縄タイムス』1964年12月10日夕刊3面）

呼んだという[28]。

◎「豊中学校」での職員研修

霊石が贈られた後も、沖縄市と豊中市の間の交流は終わることなく、幅広く展開していくことになる。1965年8月、コザ市の玉山憲栄助役が豊中市を訪れた際、豊中市の竹内助役から「特殊事情の沖縄で苦しいことが多いでしょう。私たちにできることがあれば、お手伝いしたい」と、職員研修の受け入れの提案がなされた[29]。竹内は、前年に霊石が送られたときの記事でも、「沖縄の方々が精神面で苦労しておられるのを知り、これを機会に沖縄のために役立つことがあればすすんでやりたい」と発言している[30]。

竹内は、大山の自著『大山朝常のあしあと』に寄稿した文章の中で、両市交流の契機となった懇談会で大山と交わした会話を紹介している。

いろいろ懇談しているうちに大山さんは、「沖縄は米軍政府の管轄にあるので、本土とは行政的にも切離されていて、本土の事情が分かりにくい。市の職員も、沖縄島内の市町村間だけの交流では、お互いに参考とするものがなく（略）何とか、本土の先進都市の視察をさせ、勉強させようと思うが、軍政府は、それなら台湾、フィリッピン、ハワイの都市へ行けというので困る。」と話していられた。／「それなら、豊中市へ寄こして下さい。うちの職員として、仕事をしてもらいながら、勉強させては、どうですか。／将来、沖縄が復帰したときを考えて、今から、これに備えて、本土の制度などを研究させておくことは、後日必ず役に立つときがありますよ。是非両市でこの研修を実現させようではありませんか」と申し上げた（略）[31]。

豊中市での研修を終えて

水道課　仲宗根孝市

豊中市の企画課長を招き

行政事務の指導を受ける

豊中市からの提案は、研修の間、コザ市の職員を豊中市の職員として受け入れ、給与を支給し、宿泊場所も用意するという破格の条件であった。コザ市側が負担するのは、豊中市との間の往復交通費程度であった。コザ市は、それまで毎年数名の職員を市の負担で「本土」研修に送っていたが、1カ月の間「本土」各地の市町村を「視察」するもので、「本土」の行政現場のノウハウを持ち帰るのには限界があった[32]。

豊中市への職員派遣は、コザ市行政の質的向上に大きく貢献することが予想され、早速、1965年12月、都市計画課の若手職員が豊中市へ送り込まれた[33]。当初3カ月の研修期間を2カ月延長し、主に土地区画整理事業や都市計画の手法を学んだという[34]。続いて企画室、水道課などの各部署から次々と職員が派遣された[35]。豊中市での研修の内容は、たびたび『コザ市報』で紹介されているが、窓口業務、清掃事業などでの他市町村との連携、都市計画、補助金制度と多岐にわたるものであった。

また、豊中市からも島岡総務部次長が2週間の滞在でコザ市を訪れ、事務処理の合理化などについて指導を行った。島岡は、地元紙の取材に「沖縄では機械化の面ではまだまだいっていない」「豊中市では3年前に中型電子計算機を購入し、事務のスピード化をはかっている」とコメントしているが[36]、行政現場の技術格差が大きかったことがうかがえる。

豊中市におけるコザ市職員の研修は、やがて「豊中学校」と名付けられて定着し、1975年までに延べ約120人の「卒業生」を数えた[37]。

◎絶え間ない交流

コザ市と豊中市の交流は、「豊中学校」に留まらず、市民レベルで広がりをみせていった。1970年には、園田青年会が日本万国博覧会（大阪万博）の「日本の祭り広場」に出場した際に、豊中市にも呼ばれてエイサーを披露した。当時「本土」で観る機会が少なかったエイサーは、「観衆に大きな感動を与え、非常に人気があった」という[38]。

1974年に「兄弟都市」が宣言された後は、芸能や教育などの文化活動を通して、市民同士の交流が活発化する[39]。一例として、沖縄市少年少女合唱団と豊中市少年

図3:「豊中学校」での成果を紹介する記事（『コザ市報』1966年11月号、7頁）

図4:1971年、豊中市から「友情のシンボル」として「少年の像」が贈られ、両市の関係者や児童生徒が見守る中で除幕式が行われた。現在も沖縄こどもの国で来園者を迎えている［1971年2月27日撮影、事務局所蔵］

合奏団との交流、非核平和・戦争資料展での資料提供、琉球國祭り太鼓やエイサー一行の訪問、豊中市新成人の親善派遣などが挙げられる[40]。

1995年の阪神・淡路大震災後には、沖縄市や沖縄市民からの義援金や救援物資が豊中市に届けられ、被災した市民40人が沖縄市に招待された[41]。同年8月の「復興豊中まつり」では、演舞で豊中市民を勇気づけるために、エイサー隊が派遣されている[42]。

1997年の「新生 豊中まつり」以降、沖縄市からの参加者がエイサーや琉球舞踊などの伝統芸能を紹介し、沖縄の物産展を開催することが恒例化して、今では豊中まつりに欠かせない存在である[43]。豊中まつりでは、沖縄から多数のミュージシャンが出演する沖縄音舞台が設営され、翌年に沖縄市で開催されるピースフルラブ・ロックフェスティバルのオーディションも行われる[44]。

コザ市報

友情のシンボル

豊中から"少年の像"

明るい未来を象徴

深まる兄弟都市の親善

図5:「少年の像」の寄贈を知らせる記事
（『コザ市報』1971年4月号、1頁）

2014年には、兄弟都市提携から40周年を迎え、平和、教育、文化芸術、スポーツなどさまざまな分野で周年事業が実施された。同年7月には、沖縄市において中学生平和大使相互交流学習が実施され、両市の中学生が戦争や平和について意見を交わした。同年8月には、豊中市で沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」が上演されている。同年11月に沖縄市で開催された記念式典には、それまで両市の交流に携わってきた関係者や市民など300人が出席した[45]。

以上のように、沖縄市と豊中市の交流は、最初の出会いから半世紀を過ぎても途切れることなく、さらなる発展を予感させるものとなっている。その原点に霊石があり、文字通り、両市の交流の礎石となったことは間違いない。

****

※1　同空港は、豊中市、大阪府池田市、兵庫県伊丹市の3市にまたがる。

※2　豊中市『豊中市・沖縄市　兄弟都市提携40周年事業報告書』2015年　1頁

※3　琉球政府『観光要覧』1971年度 1972年　48頁

※4　沖縄県文化観光スポーツ部 観光政策課「令和5年（暦年）沖縄県入域観光客統計概況」（https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/026/300/r5-rekinen-gaikyou-kakutei1.pdf）

※5　村山絵美「『南部戦跡』の観光資源化に関する研究-沖縄戦の語られ方の変遷-」（「研究報告」編集委員会『旅の文化研究所 研究報告』第21号、旅の文化研究所、2011年）35頁

※6　北村毅「戦死者へと／の旅-沖縄戦跡巡礼における〈遺族のコミュニタス〉-」（『人間科学研究』第18巻2号、早稲田大学人間科学学術院、2005年）140頁

※7　定まった名称はないが、当時の新聞では、他に「霊石運動」「霊石を送る運動」「霊石収集（拾集）運動」などと呼ばれていた。

※8　「PFCの誕生」（https://www.pfc.post.japanpost.jp/birth/index.html）

※9　日本郵便友の会協会『郵便友の会25年のあゆみ』1974年　77頁・369頁・434頁

※10　注9同書　373頁

※11「霊石に寄せるあたたかい波紋／全国から感謝を援助-来る彼岸に13年忌法要営む」『琉球新報』1958年2月3日／「19日に『霊石大法要』沖縄で収集の映画も上映」『琉球新報』1958年4月13日／「厳かに追悼法要／四天王寺で／本土に渡った沖縄の霊石」『琉球新報』同年4月24日

※12「戦跡にかける橋／女学生が愛の奉仕／〝霊石、ぜひこちらにも…〟／肉親眠る地に遺族の願い」『沖縄タイムス』1958年6月26日

※13「富山に霊石を抱いて（沖縄選手団総監督　喜屋武眞栄）」『琉球新報』1958年10月29日

※14「国体と遺族をなぐさめる霊石」『沖縄タイムス』1962年10月20日

※15「春の靖国に出発／5歳の坊やも社頭対面／阿波根さんが霊石携え上京」『琉球新報』1958年4月15日

※16「北海道に霊石おくる／PTA代表が遺族の手へ」『沖縄タイムス』1958年7月13日

※17「ボーイ・スカウトの善意実る／大阪の遺児に霊石／『沖縄戦史』の取りもつ縁で」『沖縄タイムス』1960年9月16日

※18「秋田で恩がえしの〝声援〟／国体選手団待つ高島さん／北と南を結ぶ『霊石』／嘉数さんへ／うれしい便り」『沖縄タイムス』1961年9月4日

※19「高野山に霊石送り出す／沖縄戦没者供養塔前に散布」『琉球新報』1964年7月15日

※20「霊石4万個を送る／北海道／沖縄戦遺族の要望で」『沖縄タイムス』1964年4月26日

※21　竹内義治「大山朝常先生と壺」（『大山朝常のあしあと』（大山伝記編集協力委員会、1977年）673頁

※22　大山朝常『愛ひとすじに：大山光伝』ニライ社 1990年　201頁

※23「沖縄から霊石／さっそく遺族へ贈る／豊中」『朝日新聞（大阪）』1964年12月9日

※24　大山朝常「日本青年学生沖縄県戦没者遺骨収集団〈沖戦遺〉の結成によせて」（沖縄県師範学校龍潭同窓会編『傷魂を刻む：わが戦争体験記』龍潭同窓会、1986年）　582～583頁

※25「摩文仁の霊石／豊中市の遺族へおくる」『沖縄タイムス』1964年12月10日

※26　注23に同じ。なお、「平和の礎」には、2,339人（2016年６月現在）の大阪府出身者が刻銘されている。

※27　注25に同じ

※28「友情の花真赤に／仏桑華の咲く豊中市」『沖縄タイムス』1966年2月14日

※29「コザ市役所吏員を毎年招く／豊中市／大阪から朗報／霊石の世話のお礼に」『琉球新報』1965年10月14日

※30　注25に同じ

※31　注21同書　673頁

※32　注29に同じ

※33「友情の職員研修／霊石が縁結び／コザと豊中市」『沖縄タイムス』1966年1月22日

※34「豊中便り／スケールの大きい都市計画を／幸地君『自治大阪』にインタビュー」『コザ市報』1966年3月号　7頁

※35　太田守昭「豊中市での研修を終えて」『コザ市報』1966年5月号　5頁。仲宗根孝市「豊中市での研修を終えて」『コザ市報』1966年11月号　7頁

※36「事務処理の簡素化を／島岡大阪府豊中企画課長／コザ市職員に指導」『沖縄タイムス』1966年11月8日

※37「トヨナカ×オキナワ／市民交流、広がる」（政策企画部広報広聴課編『広報とよなか』豊中市、2014年11月号）5頁

※38　沖縄全島エイサーまつり実行委員会『エイサー360度-歴史と現在-』（沖縄市企画部平和文化振興課、1998年）105～106頁

※39　沖縄市『沖縄市市制施行40周年記念誌』11頁

※40「沖縄兄弟都市交流について」（https://www.city.toyonaka.osaka.jp/joho/shoukai/miryoku/okinawa/index.html）

※41　豊中市『新修 豊中市史』第7巻 民俗　2003年 718頁

※42「沖縄兄弟都市提携のいきさつと交流」（https://www.city.toyonaka.osaka.jp/joho/shoukai/miryoku/okinawa/ikisatsutokouryu.html）

※43　注41同書に同じ

※44「兄弟都市提携の経緯」（https://www.city.okinawa.okinawa.jp/k034/shiseijouhou/gaiyou/shimaitoshi/3698.html）

※45　注2同書　8頁

筆者：北村（きたむら）　毅（つよし）

1973年、北海道生まれ。早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て現職。専門は、文化人類学・民俗学。著書に、『死者たちの戦後誌：沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』（御茶の水書房、2009年）などがある。